

# 北嶺の秘湖

- 1章 陰謀の大地
- 2章 ダイイングメッセージ
- 3章 さいはての地へ
- 4章 見えざる牙
- 5章 著書の秘密
- 6章 死の海の謎
- 7章 半世紀の革命
- 8章 遙かなる謀略

坂野一人  
ばんのかずひと

# 1章 陰謀の大地

## (1)

《場違いな雰囲気の女だな……旅行者かな?》

車から降りた二人の女を遠目に見た大前雅人は、一瞬、女たちが大自然の空間に迷い込んだ異邦人のように感じた。

ようやく山間部の雪が斑まだらになった北海道では、長い眠りから覚めた大地が、寝ぼけまなこで植物たちに号令をかける。すると、北の大地の小さな木々や花々は待つてましたとばかりに手を取り合つて、いつせいに初々しい色を放ちはじめ。そうなると、この道東北部の観光地・阿寒湖周辺あかんこにも、先をあらそうように観光客が押し寄せる。

大前雅人が部下の結城美悠ゆづきみゆうを伴つて旅行企画の下見に訪れた湖・オンネトーでも、すぐ隣の阿寒湖ほどではないが、ぼちぼちと観光客が立ち寄りはじめている。つい先ほども、観光バスから吐き出された中年男女の一群が、ひとしきり派手な服装と快活な関西弁で、湖の遊歩道を騒がせていた。

白い乗用車から降りた二人の女性がオンネトーの湖畔に歩いて来たのは、団体観光客が去り、湖に本来の静寂が戻ったときだった。一人はグレーのロングコートにハイヒール、もう一人はチャコールのロングコートにブーツと、夜の社交場からそのままやって来たような場違いな空気を、深閑とした芽吹きの大気に放っている。

「へえくあんな観光客もいるんだな」

雅人がつぶやいたとき、隣の美悠が怪訝な顔をした。

「あの人、もしかしたら……」

「ミュウちゃんの知ってる人?」

「そんな気がするんですけど……」

小さくうなずいた美悠は、こちらに向かつてくる二人の女を細目で凝視した。

一流私大の英文科を卒業した結城美悠は、語学力を活かそうと、海外旅行に強い日本国際ツアーリスト(JIT)へ四年前に入社した。しかし、ありきたりのパッケージツアーが幅をきかせる海外旅行の実態を知るにつけ、国内の自由な旅に興味が移り、二年前、JITに国内旅行企画部が新設されたとき、新部員の社内公募へ手をあげて異動した。

国内旅行企画部には2つの課がある。ひとつは、来日外国人客や国内団体客向けの国内パッケージツアーを企画する団体旅行企画課、もうひとつは、雅人が課長を務める国内フリーツアー企画課(国内FT企画課=個人の国内自由旅行企画)である。

二年前、雅人が三十一歳という若さで新設部署の課長に抜擢されたのは、彼が入社したとき、まだデスクという程度の規模だった国内フリーツアー(FT)セクションを希望し、以来、FT一筋に歩み、弱小部門を盛りたててきた実績が評価されたのかもしれない。しかし考えようによつては、この部署が不採算部門として撤退する羽目になったとき、ていよく人員整理ができるとふんだ経営側の策略といえなくもない。

雅人が任された国内FT課は、課員十名の構成で、美悠は最年少のスタッフである。部署がスタートした当初、同じ課に同姓の女性社員がいたため、雅人はそれと区別するため美悠さんと呼んでいたが、小所帯で顔をつきあわせているうちに、他の課員に習ってミュウちゃんと親しみを込めて呼ぶようになった。ミュウという響きが愛称として呼びやすい

こともあったが、小柄なわりに豊かな胸の線を持ち、目鼻立ちがはっきりした細面ほそおもてにブラウンのショートカットと、まるで外国産の子猫を髻髻ほうふつとさせる容貌が、ミュウちゃんという呼称にぴったりとはまるのである。その愛らしい容貌と気取らない性格のため、課内の独身男どものあいだではアイドル的な存在だが、二年前に離婚したバツイチの雅人は、その頭数からはずされているようだった。

女たちを見つめていた美悠がはっと目を開いた。

「やっぱり竹崎たけざきさんだ！ 大学のサークルの先輩ですよ」

「へえ、こんなところで先輩と会うなんて奇遇じゃないか。あいさつでもしておくか？」

「課長、竹崎先輩はS T Bの社員ですよ」

「S T B！？ ホントかよ」

雅人の背筋に苦々しい感触が走った。

S T Bの略称で呼ばれる『四季トラベルビューロ』は、J I Tのライバル企業の一社である。どちらも中堅の旅行代理店だが、もともとJ I Tは海外旅行、S T Bは国内旅行が主軸で、かつてはそれほどの競合相手ではなかった。しかしJ I Tが国内旅行企画部を新設したころ、S T Bも外国人観光客市場にのり出したため、インバウンド（海外から日本に来る）客の争奪戦で火花を散らすことが増えている。

「まさか、あつちもウチと同じ企画で下見に来てるんじゃないよな」

「でも竹崎先輩はS T Bの企画室長ですから、ただの旅行ってことはないはずだけ……」

「企画室長って、あの若さで？」

「ええ、私より三年上だから二十九歳のはずですけど」

「三十前で企画室長か……」

「だってS T Bの社長は彼女のお姉さんですから」

「あの名物女社長が！？」

脳裏にやり手の麗人として知られるS T Bの女社長・竹崎由布子たけざき ゆふこの顔が浮かぶ。

「そうか、あの社長も竹崎っていう苗字だよな。でもあの社長は、もう四十近い歳だろう？」

「歳は離れていますけど姉だそうです。私も卒業のときに竹崎先輩からS T Bに来ないかって誘われましたから多少のことは知ってるんです」

「じゃあミュウちゃんはS T Bを蹴ってウチに入社したの？」

「そうですよ」

美悠の得意そうな顔に、湖面の反射光がゆらゆらと揺れている。

「ウチより大手を蹴ったのかあ、もったいない話だな」

「でも海外旅行に関してはJ I Tのほうが強いじゃないですか」

「でもさ、海外旅行企画を希望していたのに、どうして国内旅行企画なんかへ来たの？」

「入社してから国内旅行の魅力に目覚めたんです」

「変なやつだよなあ」

雅人が顔をしかめてぶつきらぼうにいったとき、すぐ近くまで来た二人の女性のうち、グレーのコートの女性がこちらを見て「あら？」と目を開いた。

「結城さんじゃないの？」

美悠が弾かれたように女へ歩み寄る。150cmちよつとの美悠とくらべ、二人の女は

どちらも170cm近くはありそうだ。それほど高いヒールでもないのに、二人とも雅人とほぼ同じ目線になる。ジーンズにスニーカーという美悠との取り合わせは、まるで保護者と子供である。

「竹崎先輩、お久しぶりです！」

「結城さん、こんな所でどうしたの？」

訝しげな目をした女はすぐに背後の雅人に気づき、

「プライベートの旅行？」

「違いますよ。仕事ですよ」

心外といわんばかりに美悠は口をとがらせた。

「あら、会社の人だったの？」

自分に向けられた女の目に雅人はまたドキっとさせられた。たしかに業界名物の女社長・竹崎由布子とどこか似た知的で勝気な面差しである。しかし姉よりも目はぱっちりとして花が咲いたような艶やかさがある。それに上背があるから自然な所作も優雅に見える。「どうも……」

どぎまぎと頭を下げた雅人に、女はショルダーバッグから名刺を出した。

「はじめまして。私、STBの竹崎と申します」

「あ、はじめまして……JITの大前です」

名刺には竹崎七海・Nanami Takezakiとあり、肩書きは本部企画室長となっている。七海は雅人の名刺を一瞥し、「あら、国内フリーツアー企画のかたでしたか」と意外そうに目を開いた。

「まだ新しい部署なのでSTBさんのようなパワーはないですけどね」

「こちらへは旅行企画の下見で？」

「いや、下見というほどの具体性はないですけど」

すると七海は「ふふふ」と意味ありげに含み笑いをし、

「つまらないことお聞きしてごめんなさい。お互いに仕事の内情は明かせませんわよね」

「はあ……」

雅人が困っていると、美悠の明るい声が割り込んだ。

「それより先輩のほうはどうなんですか？ 仕事なんでしょう？」

「違うわよ。海外の取引先のお客様をご案内しているのよ」

七海は背後で神妙な顔をするチャコールのコートの女性を振り返り、

「こちらはアメリカからいらしたミラーさん。中国系のかたですから日本人と間違えられるんですけど、れっきとしたアメリカ人ですよ」

紹介された女性は、「チャンミラーシュウメイです」とたどたどしく自己紹介し、雅人と美悠に名刺を出した。アルファベット表記にならび、『MAファンド調査員』の肩書きと『陳Miller淑美』の和文表記がある。

名刺から顔を上げた美悠がおずおずと七海を見た。

「先輩の会社は海外のファンドとも取引があるんですか？」

「そうじゃないわ。ウチの親会社の関係。だから私もあまり詳しく知らないのよ」

「じゃあ旅行の企画で来てるんじゃないんですね」

「さっきもいったじゃない。それより結城さんはどうして国内旅行のセクシオンなの？」

海外旅行の企画がしたくてJITを選んだんじゃないの？」

「そうですね……心境の変化つてところですね」

「そうか、あれから四年もたつんだし、あなたも旅行業界に入って成長したのね」

七海は感慨深そうに後輩を見たが、すぐに、

「お仕事ならおじやましたら悪いわね。また機会があったら会いましょう」

美悠と雅人に軽く会釈し、陳ミラー淑美を促して遊歩道の先へ歩き去った。その後姿を  
呆然と見送っていた雅人の腕に美悠の肘打ちが入る。

「課長、どうしたんですか？ あんまり美人なので見とれてるんですか？」

「バカいうな。相手がライバル会社の企画室長だから、ウチと同じ企画をしていたらヤバイ  
と思ったのさ」

「たどえそうだとしても相手はインバウンド客の企画でしょう？ ウチのフルムーン企画  
とはバッティングしませんよ」

「だといいけどな。それより東雲湖の状況はどうなんだ？ 雪の最新情報を調べたのか？」

「あ、そうだった。すぐ調べます！」

美悠は携帯電話を取り出し、次の下見予定の東雲湖を管轄する観光協会をコールした。

JITの国内フリーツアー企画課、つまり個人の自由な国内旅行をプロデュースする  
雅人の課で、今秋からの目玉として企画しているのがフルムーン旅行企画である。

団塊世代の大量退職を背景に、あらゆる業界で熟高年層への商品企画や販売が熾烈さを  
増している。その世代へのアンケートによれば、退職後、やりたいことのダントツ1位が  
『旅』であり、旅行業界でも、団塊世代の退職者をターゲットにした旅行企画が、雨後の  
筍のように登場しはじめている。当然、JITでも熟年層の取り込みは重要な課題で、得  
意とする海外旅行ではいち早く世界各地への熟高年向けパッケージツアーや豪華客船での  
世界旅などを打ち出した。しかし国内旅行となると熟高年の旅心を刺激する画期的なアイ  
デアが乏しく、苦戦を強いられていた。

そんなとき媒体編集部からとんでもない企画が持ち込まれた。

JITには旅行雑誌やガイド本などを編集・発行する媒体編集部がある。その部長の手塚  
栄一がじきじきに持ち込んだ企画とは、フルムーンパスを利用した旅行企画だった。

フルムーンパスとは、JRの『フルムーン夫婦グリーンパス』の愛称で、十月から翌年  
五月までの限定八カ月間で発売される特別乗車チケットである。夫婦の年齢合計が八十八  
歳以上なら全国のJR路線が乗り放題という内容で、期間も五日間、七日間、十二日間の  
3種類がある。最大の売りはグリーン車が使える点と、夫婦二人で八万五百円からという  
価格にあり、うまく利用すれば破格の交通費で全国へグリーン車の旅ができる。

「俺が不眠不休で丸一週間もかけた」と大袈裟な前ぶりで渡された企画書には、

『現代の熟高年は旅慣れている。しかし自ら旅を企画するほどの知識や意欲は薄い。とい  
って既存の団体旅行には飽き飽きしているし、今さらチープな団体旅行などしたくない。  
必要なのは、退職者の特権である時間のゆとりをフルに活かし、従来にないゴージャスさ  
や達成感があり、知的好奇心を満足させる旅、そして、ある程度の自由さがある個人旅を  
提案することである』と概文が綴られ、

『急ぐ必要がないのも特権である。従って《移動もまた旅》という新たな旅の味わいを提

案できるグリーン車の豪華さと快適さをアピールし、これを活用した半オーダーメイドの旅行企画を春・秋で各3企画、初年度は東京駅発のプランで提案する』と続く。

さらに、この商品の広報・宣伝手段として、

『3企画を熟年夫婦のドラマ&紀行文として創作したパンフレットを作成し、同時にTV局および広告代理店とのタイアップを視野に入れ、JRをメインスポンサーに、熟高年の人間ドラマがある旅番組の企画として提案する』と結ばれていた。

つまりコースと乗車列車だけをパック化し、出発日、宿泊施設のグレードやオプションは自由選択で、その間の時間や行動も自分たちが管理するという夫婦旅の商品企画であり、移動もまた旅という趣旨から新幹線のグリーン車をフルに活用できる行程で、新幹線以外の在来線も名物特急のグリーン車を選定するという、従来では考えられなかった企画内容である。半オーダーメイドの旅とはいえ個人フリー旅行の領域に入るため、国内FT課が主体となって進めることになった。

この企画の原案は、媒体編集部長の大学の同期である旅行作家によって提案されたという。2回目の企画会議には旅行作家本人も参加し、具体的な企画内容をレクチャーした。雅人は驚いてしまった。

具体企画は、まず『人生第2幕への夫婦旅／深（心）婚旅行へ』と大テーマが掲げられ、『歴史編・自然編・健康編』と熟年層の興味を引きそうなカテゴリーで、それぞれ『歴史編（例）天孫降臨の謎（3つの神話の地を巡る九州の旅）』『自然編（例）秘湖の伝説（北海道3大秘湖をめぐる神秘の旅）』『健康編（例）マイナスイオンの洗礼（日本3大名曝を制覇する旅）』と述べられ、利用列車のモデルパターンもあった。新幹線のグリーン車と主要幹線の名物特急を巧みに乗り継ぐ行程計画にも驚いたが、それよりも、則尾操のりおせうと紹介された旅行作家の風貌と、ひょうきんでとぼけた話ぶりにびっくりさせられたのである。

ずんぐりした四十年配のオヤジなのに、ぼさぼさの頭髮と、どこか憎めない少年のようなあどけなさが残る顔立ちの則尾は、自己紹介の第一声で、

「ボクの名前は『乗り遅れ一番』と読めます。ひとつ先の時代に乗り遅れているうちに現代の先頭を走るようになっていました。でも列車の旅に乗り遅れは禁物きんぶつ、従って今回の企画は真剣に勝負します」

部長連中のしかめ面つらなど意に介さず、ひょうひょうとレクチャーをはじめたのである。具体プランはユニークで面白い内容だった。しかし、数と量を優先する旅行業界の体質からはやや冒険という懸念もある。ところが従来にない専門パンフレットの制作やTV番組企画をからめての広報・営業戦略ということで、媒体編集部長の手塚は大乗り気。国内旅行企画の恩田部長も「これまでどの代理店も手がつけられなかったからこそ、ウチの独占企画になる」と意欲満々。今秋のフルムーンパス発行時から試験的にスタートするという針で、現地のリサーチと企画詳細決定を行うことがあっさり決まり、雅人の国内FT企画の課員がチームを組み、3つのプランそれぞれに下見を開始したのである。

なかでも『北海道3大秘湖をめぐる神秘の旅』は、人気が高い寝台特急『北斗星』を利用した七日間の豪華プランであり、今回の企画の広告塔とも見込まれた。ただし地理的には秘湖の最寄り駅から観光タクシーを利用せねばならず、その具体的な可能性と所要時間を探るため、課長の雅人と美悠がチームを組み、二日前に北海道へ下見に来たのである。

北海道3大秘湖とは、支笏湖ししつこの近くにある『オコタンへ湖』、然別湖しかりべつこの近くにある『東雲

湖』そして、阿寒湖の近くにある『オンネットー』の3湖である。選定の理由については定かでないが、一般的にこの3湖をもって3大秘湖と呼ぶようである。則尾の企画によると、札幌まで北斗星を利用し、そこから根室本線（滝川まで函館本線経由）で富良野へ行き、周辺観光をした翌日に再び根室本線で帯広市へ。帯広で連泊し、観光タクシーでオンネットーと東雲湖をめぐる。帰路は根室本線・石勝本線を利用して千歳市に行き、オコタンへ湖を見てから札幌へ戻り、札幌から北斗星で帰るという六泊七日の設定である。

雅人たちが、その企画行程に沿って最初に訪れたオンネットーは、原生林のなかにひっそりと息づく周囲2・5kmほどの小さな湖であり、光の加減で湖面の色が変化することから五色沼と別称されている。オンネットーの名は、アイヌ語のオンネ『年老いた・大きな』と、トー『湖・沼』に由来するという。

湖岸まで迫るエゾマツやトドマツの林間を、ダケカンバなど広葉樹の淡い芽吹きの色が煙るように染め、その背後に雄々しく立ちはだかる雌阿寒岳と阿寒富士の残雪の霊峰が連なっている。それが波ひとつない湖面にくつきりと映る光景を見ると、無垢な大気に溶け込んでしまったかのようなすがすがしい気分になる。まさに3大秘湖企画の目玉となるロケーションだった。

絵のような湖面に見とれていた雅人を、美悠の声が現実へと引き戻した。

「東雲湖はまだ雪があつて行けないそうです」

3大秘湖のなかでも東雲湖だけは車での接近ができない。大雪山系の懷に抱かれた然別湖の湖畔から、原生林をかき分けるケモノ道のような林道を二キロほど歩かなくてはならない。途中で希少種であるナキウサギの生息地もあり、味わい深いトレッキングではあるが、今年はまだ雪が残っており、歩行は無理ということだった。

「この企画は秋の早目と連休明け以降じゃないと無理だな。採算が合うかどうか怪しいよ」

「でも寝台特急の北斗星が使えるし、オプシオンも豊富ですから、利用できる期間は短くても集客は期待できるんじゃないんですか？ それに雪の心配は東雲湖だけですから、いざとなったら東雲湖を然別湖に振り替えてもいいと思うんですけど」

「部長連中もそう踏んではいるけどね……とりあえず予定を一日早めて、明日はオコタンへ湖の下見だな」

「でも課長、千歳南駅からの観光タクシーの予約はあさつてですよ」

「そうか、そうだったなあ」

「リサーチの時期が早すぎたんですね」

「会社が決めたことだからしょうがないさ。それに今回は観光タクシーの状況や周辺観光のオプシオン調査がメインだから、そっちを優先するしかないな。とりあえず、あさつての予定だった札幌支店訪問を一日繰り上げることにするか。明日、然別湖を見たら、そのまま札幌だな」

「おかげで、また北海道に来られますね」

美悠がニコッと微笑む。

「仕事じゃなかったら大歓迎だけどね」

二人は待たせてあった観光タクシーで、宿泊を予約した帯広市のホテルへと戻った。

翌日、観光タクシーで然別湖を下見した雅人たちは帯広駅まで戻り、札幌・帯広間を結

ぶ『スーパーとかち』の上り列車に乗った。

この特急列車は根室本線の途中駅・新得駅しんとくから日高山脈を貫いて千歳市に向かう石勝線を経由している。グリーン車のシートは落ち着いた革張りで、車窓には芽吹きはじめた日高山脈の雄大な起伏が、静かな映像のように移ろっていく。

当初の予定では、石勝線が千歳線に交わる南千歳駅に下車する行程だったが、日程が一日早まったため、そのまま終点の札幌まで乗って自社の札幌支店に顔を出した。札幌支店では今回の旅行企画商品の宿泊やオプションの売上などがすべて営業収益として計上できるとあって大変な歓迎ぶりだった。ミーティングもそこに、二人は夕刻から市内の観光スポットめぐりに連れ出され、夜は薄野うすきののネオン街で生ラムのジンギスカンにビール園直送の生ビールと大盤振る舞いだった。

翌朝、札幌駅から千歳線の特急に乗った雅人はアルコールが抜けきれず、南千歳駅までの約三十分、倒したシートで惰眠を貪るハメになった。

南千歳駅からは予約した観光タクシーで支笏湖の先にあるオコタンペ湖へ向かう。整備された山間の道道どうどうを三十分ほど登ると正面に支笏湖の湖面が現われ、室蘭面むろらんからの国道453号線と合流する。さざなみが立つ湖面を望みながら北岸に沿った国道を十分ほど行くと、湖面は次第に遠ざかり、道は小高い恵庭岳えにわの山懐に入り込んだ。

すぐに『オコタンペ湖』の標識が現われた。それに従って道道へ左折し、ダケカンバやエゾマツの原生林のなかを数分走ると、右手の眼下、山肌を埋めた樹林の底に、空の色をそのまま映した深いブルーの湖面が見えた。

「けっこう神秘的だなあ！」

雅人の感嘆の声を聞き、運転手が自慢そうにいった。

「周囲は五キロもない小さい湖ですけど、天気によって水の色が緑や青に変わる不思議な湖ですよ。車では湖畔まで行けませんので、とりあえず展望台へ行きますね」

やがて前右手に展望台が現われる。駐車場には数台の車があった。

「課長、あの車、竹崎先輩たちの車じゃないですか？」

美悠が駐車場から出ようとする白い乗用車を目ざとく見つけた。なるほど、白い乗用車はオンネトーで見た車種の種類である。

国道の面へ戻る白い乗用車とすれちがいざま美悠が声をあげた。

「やっぱり竹崎先輩ですよ。助手席の女性も同じ人だわ！」

「まずいなあ、やっぱり敵さんも3大秘湖だよ」

「そうみたいですわね……」

「でも、こっちはフルムーン企画だからな。そこまではバッキングしてないさ」  
不安を拭おうと意識して明るくいったが、美悠は悄然とうつむいたままだった。

## (2)

北海道から戻った翌々日、雅人は他のチームの下見概要報告書をまとめ、媒体編集部長の手塚栄一てづつかさかずに報告した。

「問題が多そうなのは北海道のプランか……」

手塚はヒゲ面ひげをしかめ、ため息をついた。

「そうですね。今回も東雲湖は残雪でアウトでした。それとですね、東雲湖とオコタンペ



湖は冬季にアプローチ道が閉鎖されるんです。だからフルムーン企画の稼動可能な期間は、実質で二カ月ちよつとしかありませんよ」

「そんなことも調べないで行ったの？」

「急かせて、日程を決めたのは部長ですよ」

「そうだったかな？」

《ほくら、はじまった》

雅人は手塚のヒゲ面を唾然と見た。この部長、やり手で聞こえてはいるが、その場の思いつきで物事を進めることもしばしば。うまくいったときでも『深慮なき結果オーライ』しくじったときのとぼけぶりは『若年性アルツハイマー』と陰口をたたかれている。

「まあいいや。それで、そのほかの状況は？」

「在来線のグリーン車は快適です。それに観光タクシーとの折衝もOK。料金的にもかなりダンピングしてくれそうです。来週までに宿泊候補やオプションなどを含めたレポートをまとめますから、詳しいことはそっちで見てください。それと……ちよつと気にかかることがあつたんですけど……」

「なんか問題でもあつたの？」

「じつは……」

雅人はオンネトーとオコタンペ湖でSTBの企画室長に出くわしたことを話した。

「オーマイガッ！」

手塚はオーバーに両手を広げ、口をあんどりと開いた。

「部長、そのネタはもうやめましようよ」

雅人は苦々しく手塚を睨んだ。

雅人が入社した十年前、最初に配属された国内旅行デスクで、手塚は直属のマネージャーだった。配属当初、へまを繰り返す新人に「おまえの名前をな、音で読むとガットじゃねえか。そのせいで俺は始末書を見るたびオーマイガッだよ」と、知られたくない名前の秘密を見破られてしまった。それ以来、手塚が媒体編集部長へ栄転するまでの三年間、何度このシャレをお見舞いされたことか。おかげでデスクのスタッフはおろか、本社中はこのシャレが響き渡ってしまった。雅人が国内FT企画課長に抜擢されてからは、さすがに役付きへのダシャレは憚られ、影を潜めてはいるが、新人時代の直属上司である手塚には、課長の印籠などまるで通用しない。

「大前よ、STBの竹崎姐御の妹が動いているとなると、もたもたしちやあいらねえぞ」  
久々のシャレで遊んではみたものの、手塚もSTBの動きが気になるようである。

「ミュウちゃん先輩ですから、彼女に敵さんの状況を探ってもらいましようか？」

「バカこけ、ヤブヘビになつたらどうするんだ。相手は業界に聞こえた魔女の妹だけ」

「じゃあどうしますか？」

「今回の企画を一日でも早くまとめる。先に発表したほうが勝ちだからな。いいな！」

手塚はヤケクソ気味にタバコをくわえ、ジツポのライターで不機嫌に火をつけた。

翌日から雅人は国内FT課のスタッフにはっぱをかけ、フルムーン旅行商品のまとめに奔走した。JRとの交渉はもとより、3つのプランの現地リサーチ、観光タクシーや宿泊施設の候補選定、オプション関係との交渉、さらには各支店で旅行を販売するためのセールスマニユアルの企画から顧客へのバックアップ体制づくりなど仕事は限りなくある。

原案者である旅行作家の則尾操一も、ときおり会社に顔を見せた。彼の来訪時はそのまま手塚部長をまじえた戦略会議となる。

しかし、ようやく大筋の目安がつきはじめた五月の後半、これまでの奮闘に冷水を浴びせる事件が報じられた。

五月も最終の週に入った火曜日の朝九時ごろ、オンネトーの湖畔で初老の男の縊死遺体が発見されたのである。

道東はまさに春の花が咲き盛るシーズンに入り、その日も団体客を乗せたバスが、阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖など道東内陸部の観光スポットへと押し寄せていた。それら団体客のうち、その日一番でオンネトーを訪れた一群が、湖畔の遊歩道から少し入った林のなかで、エゾマツの低い幹にぶら下がる縊死体を発見し、パニックに陥った。

北海道では毎年千五百人を越える自殺者があり、都道府県別でもワースト3に数えられている。疲弊した経済状況による心神耗弱者の増加が主な原因とされるが、最近の研究では冬場の日照不足による鬱病説なども要因の一部ということである。連絡を受けて駆けつけた釧路警察署管内の警察官も、当初は多発する自殺者とみなしていたが、身元が判明するにいたって事態はただならぬ様相を帯び、その日の午後にはトップニュースとなって全国メディアを駆けめぐった。

縊死体は元衆議院議員の亀山隆盛かめやまたかもちだった。今年で六十六歳になる亀山は、北海道出身の当選5回を数える代議士で、前々回の衆議院選挙前までは、与党の有力議員に名を連ねていた。ところが、前々回の衆院選挙で落選の憂き目を見て、政権交代の歴史的な選挙となった衆議院選挙でも票が届かなかった。現在は講演活動や企業のコサルタントのようなことをしているが、政界への返り咲きにも十分にチャンスを残す年齢である。

その一報がテレビで報じられた午後、雅人は手塚部長と則尾操一の三人でミーティングの最中だった。血相を変えて会議室へ来た課のスタッフから、このニュースが告げられた瞬間、手塚は「オーマイガッ！」とそっくり返るように天井を仰いだ。

オンネトーは『北海道3大秘湖をめぐるフルムーン旅行』の目玉ともいえるスポットである。しかし神秘の大自然も、この縊死事件によって怪奇的なイメージに染まってしまう。

「部長、シャレてる場合じゃないですよ！」

「シャレじゃねえよ。心底からオーマイガッだ！」

「大丈夫ですよ。この商品の販売は半年も先だし、そのころは世間も忘れてますって」

「でもよ、亀山は親ロシア派で聞こえた議員だぜ。ロシアンファイアなんかとの関係で真相明がもめたら、秋口になっても世間を騒がせている可能性があるじゃねえか！」

吐き捨てるようにいった手塚を、則尾がのんびりした口調で慰めた。

「そう悲観したもんでもないさ。この事件を逆手に取って考えれば、話題性が増す可能性だってあるよ」

「おまえは相変わらず能天気だなあ」

「ポジティブに考えただけさ。手塚こそ昔よりペシミストになったんじゃないの」

「こんな厳しい業界にいればよ、悲観的にもなるさ」

「そうかなあ、手塚は学生時代からずっと悲観主義者だよ。だから今回のことだった、おまえの杞憂ってことになるさ」

「だといいけどな……」

手塚部長は苦りきった顔でため息をついた。

オンネットーで縊死した亀山隆盛は、かつては党内でもかなりの勢力を持つ代議士である。しかし前々回の衆院選挙で、同じ党の別派閥の新人候補に敗れ、現在は政治の第一線から退いたかたちになっている。北海道という土地柄か、亀山は親ロシア派の議員として知られ、米国べったりの政策を旨とする与党内では異色の存在だった。もつとも、それがゆえに党内の主流派から疎まれ、対立候補を立てられる羽目になったともいわれるが、第一線から退いた今でも、政界の裏で暗躍していると伝えられている。

亀山の死は、その不可解な縊死状況ともあわせ、報道番組を独占した。道警は大量の睡眠薬を服用しての自殺と発表したのが、事情通のあいだでは、道内を跋扈するロシアンマフィアとの関連もささやかれ、トラブルに巻き込まれたのでは、という憶測も流れた。

その夜、亀山元議員の縊死を報じるニュースを見ているうちに、雅人は手塚部長の悲観的な憶測が、必ずしも杞憂ではないかもしれないと、不吉な予感を抱いた。

しかしその三日後、さらに絶望的な事態が発生した。

大雪山国立公園内でも唯一の自然湖である然別湖は、周囲約14kmのカルデラ湖である。北海道の天然記念物・ミヤベイワナをはじめ、貴重な淡水魚が自然繁殖する豊かな生態系が手つかずのまま残っている。

然別湖のさらに奥、深い原生林の底にひっそり息づく湖が、北海道3大秘湖のひとつに数えられる東雲湖である。周囲は1kmもなく、水深も浅く、湖というより沼に近い風情で、別名・東小沼とも呼ばれる。流入・流出する川もなく、湖底に堆積する枯れ葦などで陸化が進み、いずれ消滅する運命を背負った湖である。そんな儂さを秘めた東雲湖へは、徒歩以外にアプローチ法がない。

以前は然別湖を周遊する遊覧船で対岸の船着場へ行き、そこから十五分ほど原生林を歩くルートもあったが、殺到する観光客が自然の生態系を乱すという理由で、何年か前に船での接岸は廃止された。現在は然別湖畔の温泉街から白雲山登山道と呼ばれる原生林の道を歩き、途中から然別湖を迂回する湖畔の道へ折れ、かつての船着場まで行く徒歩道があるばかり。

船着場跡から深森の登山道を行くと、いきなり視界がひらけ、原生林のあいだに岩がごろごろとむきだした光景が広がる。その一帯は天然記念物・ナキウサギの生息地として知られている。姿を見るのはまれだが、キュッキュという鳥のような声や、キューーンと大気を切り裂く遠吠えを聞くチャンスは多い。

ようやく雪が消えたナキウサギの生息地で、東雲湖へのトレッキングを楽しむ観光客が、初老の男の死体に遭遇したのは、亀山元議員の縊死から二日後の日曜だった。

連絡を受けた警察は、臨時の船で現場に向かったが、司法解剖の結果、頭部および全身に打撲痕が認められたため、殺人事件として、最寄りの新得警察署内に初動捜査の本部を設置した。しかし並行して行われた身元捜査の結果、遺体が元農林水産省の官僚で、現在は農水省の下部団体である北海道農業推進機構第7局長の白石琢磨であることが判明し、事件は釧路面本部へと移管された。

白石琢磨は六十五歳で、五年前に農水省を定年退職して現在の団体に天下った準キャリア

ア官僚である。農水省時代から、出身地である北海道農政への思い入れが強く、この天下りはまさにはまり役でもあった。しかし事件の最大のポイントは二日前に縊死体で発見された亀山元議員との関連である。

亀山は、現役時代に北海道開発政務次官を務めた経験を持つが、当時から北海道の農業政策をめぐり、農林水産省の官僚・白石琢磨との蜜月が噂されていた。

亀山の死は自殺の線が濃厚としても、白石琢磨はあきらかに他殺である。とくに司法解剖の結果、白石の遺体が死後二日以上経過と判明してからは、亀山の自殺との前後関係も含め、政官に根を張る不可解な謎としてさまざまな憶測を呼んだ。

「部長、マジでヤバイですよ」

「シヤレになんねえよな……」

事件の速報が流れた翌日の夕刻、手塚部長の緊急招集で媒体編集部の応接室に集まった雅人と則尾は暗澹たる視線を交わした。

「則尾、この企画の代案……ある？」

生気を失った手塚が、ソファにぐったりもたれ、声を絞りだした。

「もちろんあるさ」

手塚をいたわるように、則尾はにっこり顔をほころばせた。

「秘湖のプランを考えたとき、『日本の最北と最東の岬をめぐる旅』というのも考えたんだ。同じ北斗星を使って、現地では稚内の宗谷岬、根室の納沙布岬の2つの岬をめぐるプランだけど、冬でも3大秘湖よりアプローチがしやすいから、営業面では有利かもしれないよ」

「でもよ、3大秘湖にくらべたらインパクトが弱いよな」

「だから一番のお勧めプランで3大秘湖を選んだけどね。せつかく大前くんの下見までしてもらったのに、無駄になっちゃったね」

「オレは仕事だからいいですけど、3大秘湖っていうアプローチは、ミステリアスな感じがして熟高年の旅心をひきそうだと思ったんですけどね」

すると手塚がヤケクソ気味にぼやいた。

「マジでミステリーツアーになっちまったなあ……こうなりやあ秘湖はあきらめて岬めぐりでいくか？」

「それが無難な線ですね。でも部長、これでSTBの企画もPAですよ。こっちには則尾さんの岬プランのおかげでアドバンテージを稼げましたしね」

雅人は則尾を見て「ね？」と目でサインを送った。しかし則尾は「え？」と目をむき、

「STBの企画って、なに？」

「あれ、則尾さんにはまだ話していませんでしたっけ？」

雅人はオンネトーとオコタンペ湖でSTBの企画室長に出くわした一件を話した。

「敵さんは親会社のお客さんで、たしかMAファンドの調査員とかいう女性を案内しているだけだといっていましたけど」

「MAファンド？ 本当に？」

則尾が目もとをゆがめて聞き返す。

「もらった名刺にはそう書いてありました。則尾さん、知ってるんですか？」

「STBの親会社って、たしか四季観光産業だよな」

「そうですよ。全国にホテルチェーンを展開している業界最大手です。だからSTBが本気でウチと同じような企画を立ててきたら、資本力がケタ違いですからヤバイですよ」

「四季観光産業の子会社とMAファンドか……」

すると黙って聞いていた手塚がやや焦れた様子で、

「そんなことはどうでもいいけどよお、とにかくウチは岬プランへの変更で決まりだ。則尾、岬案の具体企画をすぐにあげてくれ」

「わかった。来週の頭にはメールで送るよ。それで、ちよつと相談があるんだけど、新プランの下見で、また誰かが北海道まで下見に行くんだろう？」

「予算は厳しいけどな、しかたねえよ」

「それなら下見の日程と一緒にいいんだけど、ボクも取材したいんだ」

「ええ、則尾が行くってか？ おいおい、3つのプランを出したとき、実際に列車で行ったことがあるから取材はなしでもOKって大みえ切ったじゃねえか」

「それは3大秘湖プランの話だよ。新プランの釧路から先や旭川から先の路線はまだ乗ったことがないんだ。以前に行ったときは車だったからね、だから一度は乗ってみないと列車内の空気が見えないよ」

「マジかよ……」

大袈裟に顔をしかめた手塚はしばらく腕組みをして思索したが、

「わかった、紀行文を想像で書いたんじゃないやあシヤレになんねえからな。大前、今回の取材はおまえと則尾の二人で行け、それでいいか？」

「こっちはOKですけど」

「則尾もそれでいいな？」

「いいよ。ただし、大前くんが現地の業者と交渉しているあいだ、ボクは自由時間ってことにしてもいい？」

「好きにしろ」

手塚はへの字にゆがめた唇にタバコをくわえ、しょんぼりと火をつけた。

### (3)

それから二時間後、帰り支度をすませた雅人がエレベータに乗ろうとすると、上階から降りて来たエレベータに則尾の姿があった。

「あれ、則尾さん、まだ帰らなかったんですか？」

「あれからずっと手塚部長のグチを聞いてたよ。あんな調子のヤツだけどね、根は神経質で細かいんだ。大前くんは、これから帰宅？」

「ええ」

「ところでさあ……」

則尾がいいかけたときエレベータが一階のロビーに着いた。

JITの本社は文京区の春日駅かすがから徒歩五分、現在、再開発計画が進む地域の一角にある。本社前の白山通りからは、区役所を兼ねた文京シビックの建物が見え、その背後に東京ドームが顔をのぞかせている。

歩道に出たとき再び則尾が話しかけてきた。

「大前くんの家はどこなの？」

「オレの家ですか？ 市川いちかわですけど」

「なんだウチの近くじゃないか。ボクは船橋ふなばしだよ。そうか、市川ならラッキーだな」

「なにがラッキーなんですか？」

「もし時間があったら、これからボクにつきあわないか？」

「メシでも食うんですか？」

「それもいいけど……その前に立ち寄る所があつてね。錦糸町きんしちやうなんだけど、途中下車して一時間ぐらいつきあつてくれない？」

「急にどうしたんですか？」

「ミーティングのときMAファンドの話が出ただろう？ ボクの仲間で、そのMAファンドに興味を持つてるヤツがいてね、そいつの事務所が錦糸町にあるんだ。そこへ寄つて大前くんが北海道で会つた調査員のことを詳しく話してもらえないかと思つたのさ」

「いいですけど……オレ、ちよこつと会つただけですよ」

「印象だけでもいいんだ。ボクから伝えるより大前くんから直接話した方がいいからね。つきあつてもらつたお札に晩飯をおごるからさあ。もつとも自宅で奥さんの手料理が待つてるなら、晩飯のほうは無理には誘わないけど」

「あれ？ オレがバツイチで一人暮らしだつて、手塚部長から聞いてないんですか？」

「そりゃあ初耳だ。大前くんもバツイチ独身かあ。ボクも同じだよ」

雅人は、とぼけた中年オヤジに、ちよつとだけ親しみを覚えた。

春日駅からひとつ先の水道橋駅まで地下鉄で行き、そこでJR総武線に乗り換える。人でふくれあがつた車内に息を詰めて十数分、錦糸町の駅は、もわつとした熱気のなかに、毒々しいネオンや看板の明りが色めきたつていた。

案内されたのは、駅から歩いて七、八分の距離にあるオフィスビルの3階、ドアに貼られたアクリル板に『福田マネジメント研究所』と表記された部屋だつた。

二十坪ほどの室内にはコンピュータがならび、その一角に設けられた簡素な応接スペースに中年の紳士が一人いた。「福田です」という自己紹介とともに渡された名刺には、歴代総理名をつなぎ合わせたような『福田ふくだ勇者』という活字に、経営コンサルタントの肩書きがのつている。百八十八cmを超える上背だが、ひよろりとした体つきのためか、それとも柔らかな物腰のためか、威圧感はなかつた。

「福田は昔からの仲間なんだけど、名前がいかに政治家っぽいだろう？ ところがね、かつては議員の秘書で、マネーロンダリングを担当していたっていうシャレにならないオチあるんだ。経営コンサルタントなんか名乗つてるけど、裏社会に詳しい危ないヤツだよ」  
則尾の冗談めいた紹介に、福田は、ダンディな姿からは想像もできない人なつこい笑みを浮かべた。

「こいつの毒舌を真に受けないでくださいよ。ところで則尾からMAファンドの調査員に会つたと聞きましたが、そのときの印象を詳しく聞かせてくれませんか？」

「詳しくといっても、ほんの一、二分顔を合わせただけですから……」

雅人はそう前置きし、オンネトーでの出会いを語つた。

話を聞いた福田は、「やっぱりね」と、したり顔で則尾に目配せした。

「だろ？ やっぱり四季観光産業へのMAファンドの噂は本当だつたんだよ」

「そうだな。こりゃあ、いよいよ面白くなってきたな」

話が見えない雅人は、勝手に盛りあがる二人に割って入った。

「その……MAファンドって、なにか問題になってるんですか？」  
すると則尾は「あ、わるいわるい」と愛想をくずし、隣の福田に説明を促した。

MAファンドとは米国系のファンドで、一説には米国政府をバックにしたアンダーグラウンドのファンドということである。ベースとなった資金がいわくつきで、太平洋戦争末期に関東軍が旧満州から極秘に持ち帰った資金、あるいは戦後のGHQ最高司令官であるマッカーサーが、日本国内の美術品や金塊などを密かに米国へ運んだ資金ともいわれている。満州とマッカーサーの頭文字からMAファンドと呼ばれるが、戦後、M資金などと騒がれ、裏社会の巨額な詐欺事件や政治的な疑獄事件の陰に見え隠れした謎の資金は、すべてこのファンドに関係しているという。現在は、米国政府の裏資金や米国に本拠をおくユダヤ財閥などの資金を巻き込み、世界中に莫大な投資を行っているらしい。

金融については無知にも等しい雅人だが、世界に投資されるMAファンドの総額を聞いたとき、その途もない数字に耳を疑った。

「二百兆円!？」

しかし福田は平然と、

「事情通の話ではそのくらいはあるそうだ。ファンドのベースになった資金の出所が日本だから、MAファンド側もそれに義理立てて、毎年、国内の大手企業の裏資金として数百億単位で投資されているらしいが、それをネタにした詐欺事件もけっこう多い」

「非現実的な話ですね……」

「ははは、一般人には御伽話おとぎだろうな」

「その裏ファンドが四季観光産業とどう関係してるんですか？」

「ん？ いや、それは……」

福田は困惑を浮かべた。隣に座った則尾が「話してやれよ」とせつつく。

「しかし、このことはなあ」

「いいじゃないか、こつちだって情報をもらったんだから。それにMAファンドの調査員と一緒にいたSTBの社員は、大前さんの部下の先輩なんだから、今後の情報収集に協力してもらおう可能性だってあるし、隠したってしょうがないよ」

則尾の説得に渋々うなずいた福田は、まるで品定めをするような目で雅人を凝視した。

「大前さんは、ブラックジャーナリズムって聞いたことがある？」

「知りませんけど」

「一般に公表される事件や事故の報道の裏にある、政治的・官僚的な思惑で公にできない真実を探る連中のことなんだが、その連中のあいだで話題になっていることがある。六年前に設立された会社に巨額のMAファンド資金が投入されたかもしれないという裏情報だ。ただし、それにはいくつかの問題があつて……」

言葉をとめた福田は、話すことへの躊躇ためらいか、あるいは言葉を吟味するのか、眉間にしわを寄せて雅人の胸元あたりを見つめた。しかし、すぐに自分を納得させるように「ふむ」とうなずき、おもむろに顔をあげた。その視線には吹っ切れたような余裕があった。

「まずは投資額だ。推測では一千億円ぐらい投入されたとみられている」

「一千億円ですか！ それじゃあ投資先は相当な大企業ということですか？」

「それが第2の問題だ。名目上の投資先は北嶺観光開発という会社で、その設立運営資金として投資されている」

「北嶺観光開発って、札幌の郊外で農園と牧場のテーマパークを運営している、あの会社ですか？ たしかSTBと同じで四季観光産業の子会社ですよね」

「さすがに旅行業界だけあってよく知ってるね」

「今や北海道観光の目玉ですからね」

「つまり、ホテル産業の最大手といわれる四季観光産業への信頼性から一千億円もの出資があったという筋書きなんだが……北嶺観光開発の設立にあたっては、施設資金や土地賃借資金などで二千億円程度かかっているとみられている。それから計算すると、その内の半分をMAファンドが提供したというわけだ」

「二千億円ですかあ。そんなに巨額の資金があったんですね。どおりで施設も立派だし、派手に広告宣伝ができるわけだ。オレたちの業界では親会社がホテル業界の最大手だから資金が潤沢なんだと噂されてますけどね」

「ははは、いくらホテル業界最大手でも二千億円なんて巨額の資金を準備するのは無理だよ。四季観光産業が出資したのは五百億円程度とみられている」

「でも、それじゃあ計算が合いませんよ。不足の五百億円はどうしたんですか？」

「それを出資したのは石油精製業界大手の北条エナジーだ。しかし、そこにも問題がある。エネルギー業界の大手企業が北嶺観光開発に出資したのは、北海道を拠点に新しいビジネスをはじめたからだ。北条エナジーは北嶺観光開発への出資と同時に、北海道の石狩港にあった石油精製工場の施設を大幅に拡張した。新たに買収した工場敷地だけでも五十ヘクタール、土地買収と新設備に使った金は五百億円、つまり北条エナジーは北嶺観光開発への五百億円とあわせて一千億円程度は拠出した計算になる」

「やっぱりエネルギー業界はケタが違いますね」

「業界大手だからそれぐらいの資金力があっても不思議じゃないが……それよりも俺たちが注目したのは、北条エナジーと北嶺観光開発のオーナーが二人とも曲者だということだ。

北嶺観光開発のはキミも知っているとは思いますが、四季観光産業会長の長嶺善季、北条エナジーの社長は北条宗太郎だが、二人とも一代で会社を業界最大手に成長させた立志伝中の人物で、やり手の社長ってわけだ」

そのあと福田は不敵な笑みを浮かべた。

「大前くん、二人の苗字を組み合わせてごらん。北条の北と長嶺の嶺で北嶺になるだろう。つまり新会社の社名からも北条社長と長嶺会長の意図が推察できる。つまり、やり手の企業人が二人つるんでなにか新しい動きを開始したっていう筋書きだ」

「オレにはピンとこないですけど、なにか問題でもあるんですか？」

「さっきもいったが、北嶺観光開発の設立にあたって四季観光産業と北条エナジーの2社が用意した資金の倍近い金がMAファンドから出資されていることだ。もしMAファンドが一千億円を出資したことが事実なら、実質的な経営権を握っていることになる」

「一番の出資者が経営権を握るのは当然じゃないですか」。

「まあ、そうなんだが……そのあたりの事情はちよっと複雑だね」

福田は膝をたたくと、「コーヒーでもどうだいっ」といいながら、部屋の隅にある給湯ス



ペースへ立った。

「大前くん、いまの日本経済で一番重要な問題はなんだと思う？」

コーヒーで喉を潤した福田が穏やかな顔で聞いた。雅人は質問の意味がつかめずに戸惑った。

「オレに思いつくのは……食糧自給率が低いとか、極端な円高で輸出産業が苦しいとか、エネルギーやレアメタルの海外依存度が高いとか……その程度ですけど」

「それだよ。ひとつはガソリンを含めたエネルギーの問題だ。これは政府レベルで大号令をかけ、今の中東依存体質を変えなければ解決しない問題だが、実情はたいした策が打ち出せていない。官民協力のバイオエタノール開発などもいくつかはスタートしてるがね」

「へえ、日本でもはじまっているんですか？」

「大阪、新潟、沖縄などでスタートしている。しかしエネルギー危機の一番現実的な応急策として注目されているのは北条エナジーの動きだ」

「バイオエタノールを生産してるんですか？」

「その動きもあるが……それより現実的なのは東シベリア油田に関する動きだな。大前くんは東シベリア油田の話は知ってるかい？」

「はあ、シベリアで大油田が発見されたということぐらいは……」

「最大の問題は、その輸送ルートに関する中国と日本の国際的な駆け引きだ。中国は大慶<sup>たいせい</sup>ルート、つまり、黒龍<sup>くわんりゅう</sup>江省の大慶を経由するパイプラインの建設を主張しているが、ロシア側としては輸出先が中国に限定されるので、価格に対する決定権を失い、シベリアのエネルギー資源が中国に支配されるといふ懸念がある。そこで日本が主張するナホトカラインが注目されはじめた。これは、中国を通らずにロシアのナホトカまでパイプラインを通して、ナホトカ港から日本へ運ぶルートだが、そのルートが実現したとき、日本国内で最大の石油精製基地になるのが、北条エナジーの石狩精製工場という筋骨きだ」

「へえ、そうなると日本の中東依存もすこしは緩和されますね」

「ただし、このラインの敷設費用や最終的な原油価格などハードルも低くない。そこで北条エナジーはシベリア油田からの原油精製計画に加え、石狩精製工場に新設した巨大な施設でバイオエタノール精製やメタンハイドレード開発などの技術研究も進めている」

「メタンハイドレード？」

「海底に眠るメタンの固体結晶のことだ。日本近海は世界でも最大の埋蔵量だといわれている。とくに日本海沿岸には魚群探知機でもわかるほど海底面に露出しているらしい。問題は採掘コストが高いことだが、それさえ打開できれば石油に代わる主要なエネルギー源になりうる。つまり、日本はエネルギー資源大国になるってわけだ。その採掘技術に関して北嶺資源開発は画期的な技術開発を進めているという噂がある」

「日本が資源大国になるなんて夢のような話ですね」

「それにバイオエタノールに関して、日本が自給率100%を誇る米などを原料にすれば国内生産が可能だ」

「でも食料を原料にしたバイオエタノール生産が、世界の食料価格高騰の原因だって問題になっていないじゃないですか」

「ははは、その通り。そこで登場するのが長嶺会長の北嶺観光開発だ」

「え！？」 北嶺観光開発はミルクポットファームやベジタブルブレッドなんかの農畜産テーマパーク運営でしょう？」

北嶺観光開発が札幌市郊外に建設した、有機畜産による酪農製品をメインに全国流通のブランド化を大規模に進める『ミルクポットファーム(MPF)』と、個人が年間契約で無農薬野菜の配給契約ができる『ベジタブルブレッド(VV)』は、昨今の健康志向ののって大ブレイクしている。北海道のパックツアーには、旭川市の旭山動物園とならんで必ずコースに組み込まれる観光スポットである。

そのとき則尾が妙な顔でいった。

「ボクも去年行ったけど、面白い発想だし、規模もすごい。でもMPFやVVは北嶺観光開発の表向きのビジネスに過ぎないんだよ。裏のビジネスは北海道の休耕田や離農地を借りあげ、多収穫米や多収穫トウモロコシの品種改良をして栽培するビジネスなんだ」

「本当ですか？」

「世間には知られてないけどね。それでなけりゃあ二千億円なんて巨額の資金は必要ない。MPFやVVの建設・運営だけなら半分もあれば充分だよ。ところが北嶺観光開発は観光農牧畜園だけでなく、農業生産法人の申請をして、北海道全域の耕作放棄地や遊休農地を買収したり借りあげたりしているんだ。全部で五千ヘクタールぐらいだっという話だけど、そこで自社開発の多収穫米やトウモロコシを生産しているらしい。五千ヘクタールだけ。もしMAファンドの資金を使ったら、買収資金や借りあげ資金、それに各所の施設・設備資金などじゃないかな」

「でも、米などは生産価格と販売価格に差があつて、それが農業政策の問題にもなっているんでしょ？」 採算がとれるんですか」

雅人がうる覚えの知識で反論すると福田がニヤつと口もとをゆがめた。

「たしかに大前くんという通りだ。でも、それは従来の日本の農業が農家という個人をベースにした生産体制だったからだ。北嶺観光開発は農業の完全工業化によつて生産価格を従来の六割程度にまで抑えることに成功している。それに北嶺観光開発の多収穫米や多収穫トウモロコシは、味や品質よりも生産量に重点をおいているからバイオエタノール原料としても採算ベースに近づいているらしい。つまり北条エナジーと北嶺観光開発は見事な共同戦線を張つて現代の経済問題の打開に乗り出したという構図だが、問題は、その経営権を米国系のファンドが支配しているかもしれないという点だ」

「それでSTBの企画室長がMAファンドの調査員を案内していたんですね」

「ああ、これまで確証はなかったが、大前くんの話でMAファンドが北嶺観光開発のプロジェクトに関わっていることが見えてきた。大前くん会ったのはたぶん北嶺観光開発が大出資者のスタッフを接待していたのかもしれない」

「福田さんはその動きに関係した仕事をしてるんですか？」

「ん？」

雅人の突っこみに福田は狼狽を浮かべた。すると福田の隣でにやにやしていた則尾の顔が、いきなりバカ笑いに変わった。

「ははは、こりゃあ鋭い質問だ。大前くん、福田は金のニオイに敏感なんだよ。この話には二千億円もの資金が動いているらしいし、MAファンドなんていう真偽もわからない資金が絡んでいるんだ。福田が喰らいつく絶好の獲物ってわけさ」

それを聞いた福田は、「則尾、いいかげんなこというな」と顔をしかめた。  
「大前くん、こいつのいうことはたわごとだよ。俺はただ調査しているだけさ」  
福田はカップに残ったコーヒーひと息に飲み、ふうふうと大きなため息をついた。

福田の事務所をあとにした二人は、錦糸町の裏通りにある和食店に入った。焼き魚定食を注文した則尾は、オシボリで手をふきながら声をひそめた。

「ここだけの話だけだね、福田は、あるクライアントの依頼で例の2社の内情を調査しているんだ。どんなクライアントなのかはボクも知らないけどね」

「でも福田さんは経営コンサルタントでしょう？」

「名目はね。でも実体は裏経済の仕事人さ」

「ということは則尾さんも裏経済にかなり関わっているってことですか？」

「ボクが？ とんでもない。ボクはただの旅行作家さ。福田とは昔から腐れ縁っていうか、まあ、いろいろとお世話になった関係から、今でも懇意にはしてるけどね」

「そんな人と懇意にしている大丈夫なんですか？」

「やつは信用できる人物だし、経済社会の裏ネタを仕入れるには、またとない仲間だよ。それよりさ……」

そのとき生ビールとお通しが運ばれて来た。話を中断した則尾は、「とにかく乾杯だ」とジョッキを掲げ、旨そうに喉を鳴らした。

「あー、ビールが最高の季節になったなあ」

口の泡をオシボリで拭った則尾は神妙な表情に戻った。

「これは福田にもまだ話してないことだけど、オンネトーと東雲湖の事件さ、ボクは北嶺観光開発の動きと関連があるような気がするんだ。亀山元議員も、元農水省の白石も、北海道の農政や経済復興に深く関わっている人物じゃないか。それが相次いで死んだんだよ。ボクからいわせりゃ無関係ってほうがおかしい。3大秘湖での二人の死は、なにかのメッセージと読むべきだよ」

「メッセージ？」

「なにを意味しているのかはボクにもわからない。だから北海道に行ったとき、ちよっと調べてみようと思ってるんだ」

「下見にかこつけて、なにか調べる気ですか？」

「調べるというか、現地に行けばもっとヒビッドな情報が手に入るって期待はしているよ。それに、近いうちにオコタンペ湖でも事件が起きるはずだし……」

「マジですか？」

「予感だけだね。3大秘湖のうちの2つで事件が起こってるんだぜ、最後のひとつをスル―するなんてありえない」

雅人の脳裏に、原生林の底へ深いブルーの水をたたえるオコタンペ湖がよみがえった。オコタンペとはアイヌ語の『河口に集落がある場所』の意味だと聞いたが、神の存在すら感じさせる神秘の湖面は、およそ人間の生活と隔絶した大自然の精気を漂わせている。

その精気のなかに放置された死体をイメージしたとき、不気味な悪寒が背筋を走った。